

〔研究ノート〕

“George Hexham”はCarrollなのか？
Anne Thackeray: *From an Island* の一考察

石毛雅章

アン・サッカレー (Anne Thackeray) の著した *From an Island* には、若い写真家ジョージ・ヘクサム (George Hexham) が登場し、滞在先の主人である画家ヘンリー・セント・ジュリアン (Henry St. Julian) の次女ヘスター (Hester) と恋に落ちる。この作品はそもそもアンが父 (William Makepeace Thackeray) 急死の際にテニソン (Alfred Tennyson) やキャメロン夫人 (Mrs. Cameron) らを含むワイト島の人々から受けた恩に感謝の意を表すために書かれた。そのため、実在の人物をモデルにしたと思われる面々が数多く登場する。テニソン、キャメロン夫人をはじめ、画家ワッツ (G. F. Watts) やアン自身、そしてその娘たちである。そこでこのヘクサムにもやはり実在のモデルがいるのではないかと考えられてきた。ロジャー・テイラー (Roger Taylor) はレジナルド・サジー (Reginald Southey) ではないかと想像し⁽¹⁾、キャロライン・リーチ (Karoline Leach) はルイス・キャロルを強く推した。テイラーはサジーの名前をあげただけで、あえてそれを立証しようとはしなかったが、リーチはいくつかの論拠をあげてそれを証明しようとした⁽²⁾。本論ではこのリーチの説の妥当性を検証しつつ新たな筆者の説を提示したいと考える。

それではまず *From an Island* のあらすじを述べておこう。この作品はサイズのわりに登場人物が多く、煩雑な面も見られるので、主要な骨格のみを提示したい。

南米に派遣された外務省の職員である画家セント・ジュリアンの長女エミリア (Emilia) の夫ベヴィス・ベヴァリー (Bevis Beverley) との連絡が途絶え、不安が高まろうとしているジュリアン家に、若い写真家ジョージ・ヘクサムとベヴァリーの姉レイディ・ジェーン (Lady Jane) が突然やってくることになる。到着後、夕暮れ時にジュリアンの次女ヘスターと百合の花壇で偶然出会ったヘクサムは運命的な出会いを感じる。ヘスターもまた彼に好意を持つ。

翌日は写真日和となったため、ヘクサムはヘスターらの写真を撮影したいと申し出る。画家セント・ジュリアンの助言を得て、それはすばらしい作品となる。写真を撮ることでさらにヘスターに惹かれたヘクサムは彼女との結婚を考えるようになり、彼女一人の写真が撮りたくなる。ヘスターにそれを申し入れるが、そのあまりのなれなれしさに反感を覚えた彼女にことわられてしまう。

反駁されることに慣れていないヘクサムはそのことにすっかり腹を立て、ヘスターの目の前で同じく滞在していたレイディー・ジェーンにこれみよがしに愛想をふりまき、ヘスターの心を深く傷つける。

(1) Taylor, p. 48.

(2) Leach (2009), pp. 245-6 et al.

午後の遠出の帰り、急な崖を降りる際に難渋していたヘスターを助けようとヘクサムが手を差し伸べるが彼女はそれを拒む。

夜の団欒の場でセント・ジュリアンはワーズワース (Wordsworth) の詩を朗読する。ヘクサムはまるで説教されるようで彼の詩は大嫌いだと言いだす。感情を害したヘスターはその場を去ろうとするがヘクサムはそんな彼女に翌朝写真を撮ろうと気軽に声をかける。

翌朝当然ヘスターは現れず、気落ちするヘクサムに同情した家政婦のクウィーニー (Queenie) はヘスターに会わせてやる。ヘスターのかたくなな態度に腹を立てながらもヘクサムは彼女に必死に求婚する。ヘスターは前日のいきさつから彼のことを信じ切れずにいる。

突然レイディー・ジェーンの叫び声がし (それは後にベヴィスの事故を報じる新聞記事を見た彼女がショックを受けて発したものと知れる)、兄の事態の悪化を懸念したヘスターは思わずヘクサムに助けを求める。彼はそれに応え、ヘスターの手を握りしめる。二人は互いを必要としていることに気づく。

ベヴィスの南米での消息についての情報が錯綜する中、ヘスターとヘクサムは助け合うようになり、ヘスターは新たな勇気をもって困難に直面する。緊張が高まる中、ヘクサムは予定されていた滞在期間を延長すると宣言する。ヘスターもそれを支持する。雨風が強まり、沈みがちな皆の心をヘクサムは和らげようとする。ヘスターはヘクサムのやさしい心遣いに強く心を動かされる。

夫の安否を気遣うあまりいたたまれなくなったエミリアは、強風の中、島の人々の希望の灯でもある丘の上の信号灯のもとへ行く。彼女の身を案じたクウィーニーが彼女を見つけ家に連れ戻すと、そこには無事なベヴィスが彼女らを待ちかまえていた。

ベヴィスの帰還を祝うパーティーでヘスターとヘクサムが婚約したことがあきらかにされる。

リーチはその著 *In the Shadow of the Dreamchild: The Myth and Reality of Lewis Carroll* の中で、ヘクサムはキャロルであると主張している。論拠の第一は著者アンが所有していた *From an Island* の刊本にそう記されているというものだ。“The young man she [i. e. Anne Thackeray] describes, the photographer George Hexham, is identified as ‘Lewis Carroll’ in the author’s own copy of the book.”⁽³⁾ しかし、残念なことにこの刊本の具体的な情報はリーチの本には明示されていない。彼女が以前キャロル協会の研究誌 *The Carrollian* に掲載した論文でもそれは同様であった⁽⁴⁾。現在我々の入手しうる刊本でこの情報を記載しているものは、1996年にワイト島の Hunnyhill Publications によって発行されたもののみであり、しかもそれは裏表紙の ‘The People’ として登場人物を紹介する欄に ‘George Hexham … Lewis Carroll’ とあるだけで、それが誰によって書かれたかは明らかにされておらず、また、この件についてはその書に寄せたアンの孫娘であるベリンダ・サッカレー・ノーマン・バター (Belinda Thackeray Norman-Butler) の Foreword にも一切言及されていない。それにもかかわらず、リーチは *The Carrollian* の論文で “Her

(3) Leach (2009), p. 245.

(4) Leach (2003), p. 3.

daughter's copy of the published book was annotated with the true identities of most of the major characters, and these annotations still survive... but, most curiously, the novel's hero and romantic love interest, George Hexham, is – Lewis Carroll.”⁽⁵⁾としている。彼女はこの論文で *From an Island* の本文を Hunnyhill 版から引用しているの、この版の裏表紙にある、出所不明の情報を Foreword の書き手と結び付けてしまったのではないかと推測される。

しかし、リーチが言うように、ヘクサムとキャロルとの間に類似点があるのは認めなければならない。写真家であること、子供好きであること、ケンブリッジとオクスフォードと大学は違っていても両者とも有名大学卒であること、ワーズワース (Wordsworth) が好きではないこと、などである⁽⁶⁾。

また、ヘスターの経験や心理の描写があまりにも真に迫っているので、アンは自分自身を反映させたとされているクウィーニーよりも、むしろヘスターに感情移入して書いているのではないかとリーチは述べている。さらにリーチはこれはアン自身の経験に基づいているのではないかと、また、アンとキャロルとの間に似たような出会いがあったのではないかと、とまで想像するのだ⁽⁷⁾。たしかに、ヘスターとヘクサムの恋愛模様は活写されており、この小説の大枠となっているベヴィスの失踪と帰還という物語をかすませかねないほどだ。それではこれはアンとキャロルとの間に実際に起きたことなのだろうか。だが、ヘクサムのヘスターに対する冷たい仕打ちは従来のキャロル像とは大きくかけ離れたものだ。ヘクサム＝キャロル論は確かに魅力的ではあるがこの点にはわかに受け入れがたいところである。リーチはこれこそ若かりしキャロルの今まで見過ごされてきた一面を表すエピソードだと述べるのだが⁽⁸⁾、はたしてそうなのであろうか。両者の出会いとその交友について試みることにしよう。

初めてアンがキャロルの日記に登場するのは1869年10月5日のことで、二人は元外交官ウィリアム・シング (William Synge) の家で出会っている。

Last night I dined at the Synges, and met Dr. and Mrs. Merriman, Dr. and Mrs. Hume, Miss Thackeray (who is staying in the house), and Mr. G. Taylor⁽⁹⁾.

と、その記述はいたって淡々としていて、なんら特別な感情をうかがわせるものではない。

その後も二人の交友は続き、キャロルの日記によると、1872年1月16日と1873年1月20日にアンが妹ミニ (Minnie=Harriet Marian Thackeray) とその夫レズリー・ステイヴン (Leslie Stephen) と同居していた Onslow Garden の邸宅を訪れ、彼女に会っている。その後1877年にアンは17歳年下のいとこリッチモンド・リッチー (Richmond Ritchie) と結婚。1878年10月6日、キャロルはリッチー家をたずね、アンとその夫、娘のエフィー (Effie=Hester Helen Thackeray Ritchie) と会っている。1892年5月2日にも同家を訪れ、

(5) *ibid.*

(6) *Through the Looking-Glass* に登場する White Knight の歌 “Sitting on a Gate” は Wordsworth の詩 “Resolution and Independence” の皮肉なパロディーになっている。初出は *Train* 誌1856年10月号 (*Letters*, vol. 1, p. 55 n1)。また、1858年1月30日の日記で彼の *White Doe of Rylstone* を読んだキャロルの感想は “not much point of interest” であった (*Diaries*, vol. 3, p. 155)。

(7) Leach (2009), pp. 307-8.

(8) Leach (2009), p. 246.

(9) *Diaries*, vol. 6, p. 100.

アンとその後生まれた男の子を含めた二人の子供に会っている。1893年4月22日に訪ねた際には翌週エフィーをお茶に招待することになった。そして翌週の4月28日、エフィーがキャロルの居室を訪ねている。1894年10月29日にもキャロルはアンのもとを訪れている。再びエフィーをお茶に誘い、1894年11月3日に彼女を自室に連れ帰っている。同年11月8日には偶然道でアンとエフィーに出会い、一緒にアンの家へ行き、エフィーらとともに楽しい時を過ごしている⁽¹⁰⁾。

これらが今現在入手しうる二人の交流を示す資料のすべてである。アンは1869年に初めて実際のキャロルと出会い、その後交友が始まった、と考えざるをえないのではないだろうか。この点に関してリーチは先ほどの日記の文章中の‘met’という言葉に注目し、語義的な解釈から両者はそれ以前からの知り合いで、この時初めて出会ったのではないと主張する⁽¹¹⁾。また、キャロルの側の記録がないのは彼の1858年から1862年の間の日記が欠けているからで、その間に二人はワイト島で出会っていたのではないかと推量するのだ。

しかし、残念ながらこの間の出会いというのはまったく考えることはできない。というのはアンが初めてワイト島を訪れたのは1862年のことだからである。彼女は後々ワイト島在住のテニソン家の人々と親しくするようになるのだが、その名前が初めてテニソン夫人の日記に登場するのは1862年11月29日に彼女がキャメロン夫人の下に滞在していることを示す“Miss Thackeray is at the Camerons these days & we see her from time to time⁽¹²⁾.”という記述なのだ。

また、彼女がワイト島を最初に訪れた時期については妹ミニーのアン宛の手紙でも知ることができる。Saturday 1862という日付の手紙にこうある。

My dear Anny: many thanks for your fond letter. I am glad that my bag and you arrived safe – pray take care of these both – & write and tell me all about Mr Tennyson & what his wife is like & his little boys, & his house – Now don't make yourself in the least unhappy if I tell you that Papa is not well. I have just been to see him & he says it is a very little attack....⁽¹³⁾

ミニーがテニソン家の人々について知りたがっていることから、これ以前には姉妹ともテニソン家の人々との交流がなかったことが明らかであろう。

一方キャロルもテニソンの知己を得たくて何度もワイト島を訪れているので、二人が出会った可能性がないものかと前述のテニソン夫人の日記を調べてみたものの、両者が出会った可能性を見出すことはできなかつた。リーチのあげる“met”という語の単なる語釈に頼った解釈のみでは、それを支える明白な事実関係の情報が存在しない以上、やはり1869年に最初の出会いがあったと考えるべきであろう。

そうなると、ここに大きな問題が一つ生じることになる。それは彼らの出会いと *From an Island* (以下 *Island* と略記) の成立年代に関するものである。リーチをはじめ、アンの伝記作家であるウィニフレッド・ゲラン (Winifred Gerin)、ヘンリエッタ・ガーネット (Henrietta Garnett)、リリアン・シャンクマン (Lilian Shankman) らは *Island* が1877年

(10) *Diaries*, vols. 6, 7, 8, 9.

(11) Leach (2003), pp. 5-6; Leach (2009), pp. 307-8.

(12) *Lady Tennyson's Journal*, p. 178.

(13) *Anne Thackeray Ritchie: Journals and Letters*, p. 83.

の彼女の婚約の前後に書かれたとしている⁽¹⁴⁾。しかし、これは、最近サッカレー家の伝記を著したジョン・アプリン (John Aplin) の指摘するように、誤りである⁽¹⁵⁾。確かに *Island* が *From an Island: A Story and Some Essays* という題名でライブニッツの出版社 Tauchnitz から書物の形で出版されたのは1877年であるが、作品それ自体は1868年11月から翌年1月にかけて *Cornhill Magazine* に掲載されているのだ⁽¹⁶⁾。アンの日記を見てもそれは明らかで、1868年9月28日の日記に彼女はこう書いている。“Writing From an Island. Hexham Hester.”⁽¹⁷⁾彼女の日記の記述は短いものが多く、解読しづらいものもあるのだが、これは問題ないだろう。したがって、*Island* 成立以前にアンとキャロルが実際に出会い、前記のような恋愛模様を繰り広げたということは考えられないのだ。1869年に彼らが出会う前に *Island* は書かれてしまったのだから。

また、キャロルはアンのことを文筆家として非常に尊敬していたことも考えあわせなければならぬだろう。1887年11月5日にアンにあてた手紙にこうある。

I had with me a copy of *Five Old Friends*, etc.... in order to read a bit, now and then, before beginning to write, and so get my ear into *tune*. Not that I want to imitate your style (I don't believe in any one imitating any one else), however much I admire it but to read such English sets my fancy *going*, so to speak: till sometimes the sentences come almost too quick for me to write them down⁽¹⁸⁾.

アンの文章に対する最大級の賛辞であろう。また、1892年7月10日付の妹メアリー (Mary Charlotte Dodgson) あての手紙では、昨今の小説家の英語が過去の作家たちのそれと比べてひどいものになっていることを嘆いた後で、唯一すばらしい文章を書く作家としてアンの名を挙げている。

We have one living novelist, whose English is *lovely* - Miss Thackeray. I have brought a volume of hers with me, to read a bit, now and then, and get my ear into *tune*, before going on with *Sylvie and Bruno Concluded*....⁽¹⁹⁾

このように尊敬する作家に対してその心を傷つけるようなことをキャロルがするとはとても信じがたいことだ。

しかし、これらの事実は、アンとキャロルとの間にそのような出来事がなかったということを示してはいるが、*Island* にアンの個人的な経験が反映されているかもしれないという可能性を否定するものではない。実は *Island* で描かれているようなことがアンの身の上で起きていたのだ。1868年8月にアンは妹夫婦がアメリカへ旅立つのを見送り、その後サリー州にあるオートランズ・パーク・ホテル (Oatlands Park Hotel) に逗留する。このホテルは著名なアメリカ人たちが多く滞在することで知られており、父親の関係でアメリカ人の知人が多いアンはここをしばしば訪れている。この時も彫刻家・詩人である

(14) Gerin, p. 185; Garnett, p. 215; Shankman's introduction to *Anne Thackeray Ritchie: Journals and Letters*, pp. 171-2.

(15) Aplin (2011), p. 261, n. 11.

(16) *The Cornhill Magazine*, vols. 18, 19.

(17) *The Correspondence and Journals of the Thackeray Family*, vol. 2, p. 69.

(18) *Letters*, vol. 2, pp. 686-7.

(19) *ibid.*, p. 916.

ウィリアム・ウェットモア・ストーリー (William Wetmore Story), 美術愛好家にして芸術家たちのパトロンであるトム・アップルトン (Thomas Gold Appleton) らが滞在していた⁽²⁰⁾。その中に A. Dexter という男性がおり, 当初はアンの気を引いておきながら, 後にはほかの女性に心移して彼女に辛い思いをさせたことが8月7日の彼女の日記につづられている。

The [Wetmore] Storys & Mr Tom Appleton & Mr A Dexter & his mother were all at Oatlands & I came with the two little girls. It was American Villegiatura [= place or holiday in the country] & people coming over & talk under the trees & flirtation. Mr Dexter very handsome & very interesting being experienced I much flattered for a day or two until Mary King arrived from Rome.... Is there any touch of human kindness in Mr Dexter? I don't know....⁽²¹⁾.

これはまさに *Island* でヘスターが経験したことではないだろうか。

アンはこの件に関して非常に怒っており, 1868年8月26日付ストーリー夫人への手紙の末尾にこう書いている。

I needn't say I send you all my love. I also enclose a scrap of cold boiled mutton for Mr. Dexter⁽²²⁾.

'cold mutton' 云々はおそらく当時上流階級の婦人たちがパーティーでの残り物を持ち帰り, 貧民へ施したことに言及しているものと思われる。それほど Dexter を軽蔑していた, ということだろう。

さらに, 相手の女性にもその怒りは向けられていて, 上に引いた日記の続きにこのように書き記し, その容貌をあげつらっている。

... all my sympathies went out for there was something so genuine in her [i.e. Mary King's] ways, sometimes she seemed transformed into a beautiful woman from the ugly girl she is at others.

アンは Dexter への憎しみとキングの容貌について妹夫婦への手紙に「あんな男, あの不細工と結婚すればいいんだわ」ぐらいのことを書いたようで (その手紙自体は残っていないが), 妹の夫レズリー・ステューブに次のようにたしなめられている。

Oatlands Park is my notion of a pleasant place to stay at - only I think you behaved shamefully in trying to bully Mr. Dexter to marry an ugly young lady merely because he had been decently civil to her. Think if I had been worried into marrying a Miss Allen; I should have committed suicide by this time⁽²³⁾.

さて, この Dexter は女性だけでなく子供にも大いにもてたようだ。先に引いた8月7日のアンの日記にこうある。

Is there any touch of human kindness in Mr. Dexter? I don't know - I can't bear him to play with Margie.

Margie (Margy ともつづる) はこのときアンとともに Oatlands に滞在していた彼女の養

(20) *Correspondence*, vol. 2, p. 68.

(21) *ibid.* pp. 68-9.

(22) *Correspondence*, vol. 3, p. 52.

(23) *ibid.* p. 67.

子である。また、その翌年アンはイタリアのストーリーの下を訪れた際に Dexter と再会するのだが、そのことを妹ミニーへの手紙に書いたところ、ミニーからそれを伝え聞いたマージーの反応がアンへの返信にこう書かれている。

The other day I [i. e. Minny] said to Margy, who do you think Aunt Anny saw at [Rome], A great friend of yours - and she instantly said Mr. Dexter⁽²⁴⁾.

Dexter は周囲からマージーの “great friend” として認められていたことになる。

この、子供に愛されるという特質は実はヘクサムの特徴でもあった。先に述べた *Island* のあらすじでは省略したが、彼が逗留していた間に雨で全員が家の中に閉じ込められてしまう場面がある。その際ヘクサムは子供たちとガラス窓を伝う雨粒を使ってこんなゲームをする。

Breakfast was over. The rain was still pouring in a fitful, gusty way, green ivy-leaves were dripping, creepers hanging dully glistening about the windows, against which the great fresh drops came tumbling. The children stood curiously watching, and making a play of the falling drops. There was Susy's raindrop, and George's on the window-ledge, and Mr. Hexham's. "Oh, Mr. Hexham's has won!" cried Susy, clasping her little fat hands in an agony of interest⁽²⁵⁾.

外で遊べない雨の日に子供たちが退屈しないようにその相手をするヘクサムの心遣いがある。外で遊べない雨の日に子供たちが退屈しないようにその相手をするヘクサムの心遣いがある。

さて、このようにヘクサムとの類似点を持つ A. Dexter とはいったい何者なのだろうか。オートランズ・パーク・ホテルやローマでのストーリーの住まいとなっていたパラッツォ・バルベリーニ (Palazzo Barberini) でトム・アップルトンやストーリーらと行動を共にしていることから、彼がアメリカ人であることは明らかだと思われるのだが、そのアイデンティティーはこれまで不明とされてきた。たとえばサッカー家の伝記を書き、書簡集も編纂したジョン・アプリンは書簡集の注にこう書いている。

The identity of Dexter, another American to whom Annie felt momentarily attracted, remains elusive⁽²⁶⁾.

また、アンの伝記を書いたヘンリエッタ・ガーネットもやはり注にこのように書いているだけである。

[Dexter is] Unidentified, but very likely descended from the donors who set up the Dexter Lectureship at Harvard in the early nineteenth century⁽²⁷⁾.

おそらくはサッカー家の手紙や文書ほぼすべてに目を通したであろうこれら伝記作家になぜ Dexter の正体がわからなかったのだろうか。それはおそらく彼がアメリカ人であり、また、それらの資料には “A. Dexter” もしくは単に “Mr. Dexter” としか書かれておらず、ファーストネームがわからなかったからではないだろうかと推測される。したがって我々はその搜索の範囲を彼らの参照した資料よりももう少し広げる必要があるだろう。Dexter がイギリスやイタリアのアメリカ人グループと行動をとともにしていたことから、そのメン

(24) *ibid.* p. 160.

(25) *Island*, p. 49.

(26) *Correspondence*, vol. 2, p. 68, n. 6.

(27) Garnett, p. 300, n. 41.

バーにあたってみることから始めるのがよいと思われる。

イタリアに長く滞在して創作活動を続けた前出の彫刻家ストーリーの周辺には彼の友人たちが多く集っていた。その交友を記録したのが作家ヘンリー・ジェームズ (Henry James) である。彼の *William Wetmore Story and His Friends* (1903) にはストーリーとその周辺の人々についての詳しい記述がある。画家ハミルトン・ワイルド (Hamilton Wild) について述べた個所にこうある。

I recall Hamilton Wild, at all events, with two or three others – with T. G. Appleton, with Arthur Dexter, the “mio amico Arturo” of the dedication of Story’s “Graffiti d’Italia” – of the small, select company of the bachelors of Boston, a group so almost romantic in their rarity that their “note” would suggest, their title verily adorn, a light modern opera⁽²⁸⁾.

上記 “Graffiti d’Italia” というのは1868年に出版されたストーリーの詩集で、献辞に “AL MIO AMICO ARTURO DEXTER” とある。英語では “To My Friend Arthur Dexter” ということになるだろう⁽²⁹⁾。そのデクスターや前出トム・アップルトンらとともにワイルドのことを思い出す、としているのだ。“the small, select company of the bachelors of Boston” とあるが、ジェームズ自身生涯独身であったことは言うまでもないだろう。

アンが “A. Dexter” に出会ったオートランズ・パーク・ホテルにはストーリーやアップルトンが同宿していたと彼女の日記にあった。その同じデクスターとイタリアのストーリー邸で再会したことが彼女の妹あての手紙に書かれている⁽³⁰⁾。したがってこの A. Dexter がストーリーを中心としたグループの一員である Arthur Dexter であることはまず間違いないことであろう。それではこの Arthur Dexter 氏とはいかなる人物なのであろうか。

まさに “the small, select company of the bachelors of Boston” が活躍したボストンに Boston Athenaeum という図書館がある。1807年に創設された歴史ある会員制の図書館で、膨大な蔵書を誇る中、特にニューイングランド、そしてボストンの歴史の資料に強いとされている。その Digital Collection の中に “Four Nineteenth-Century Albums with Photographs by Arthur Dexter”⁽³¹⁾ というページがある。デクスターの経歴の紹介と彼の撮影した写真のアルバム4冊がデジタル化されて掲載されており、その映像はすべて閲覧することができる。イタリアやエジプトの建築物や遺構、知人や現地人のポートレートと多彩な内容で、彼がいかに撮影術に長けていたかを示す作品群である。そう、彼は実はヘキサム同様写真家でもあったのだ。

キュレクターのキャタリーナ・スローターバック (Catherina Slautterback) によると、アーサー・デクスターは1830年に高名な法律家の4男としてボストンで生まれた。1851年ハーヴァード大学を卒業後パリのエコール・デ・ボーザールで建築を学ぶ。1855年に帰国後は法曹界で活躍。1858年から60年にかけて州兵軍に入隊。除隊後、1860年代、70年代は主にヨーロッパで美術や文学の研究をして過ごす。60年代には写真に興味を示し、写真術

(28) James, p. 363.

(29) Story, p. ix.

(30) *Correspondence*, vol. 3, p. 152 (Annie to Minny, 22 March 1869)

(31) <<http://cdm.bostonathenaeum.org/cdm/landingpage/collection/p16057coll12>>

を修得、特に人物ポートレートに優れた作品を残した。パリやローマに滞在中は同じくアメリカからやってきていたヘンリー・ジェイムズやウィリアム・ストーリーらと交友があった。帰国後は文学や芸術の知識を生かし、さまざまな出版物に記事を発表した。語学にたけていたので、ハインリッヒ・ハイネの自伝を訳しもしている。芸術の後援活動や慈善事業にも力を注いだ、とある⁽³²⁾。彼がヨーロッパで過ごした時期はまさにアンがストーリーらの一行の一員だった‘A. Dexter’と出会った時期であったのだ。

今一つヘクサムとデクスターの類似点として、名前の‘ex’の音の響きが似ている、ということもあげられよう。Hexhamは非常にめずらしい姓で、*Dictionary of National Biography*にはHenry Hexham (1585-1650?) 一人しか掲載されていない。むしろノーサンバーランド州にある同名の地方都市のほうがよく知られている。だからアンの周囲にいた人間なら、アンの作品に登場する、女性に冷たい仕打ちをした写真家で子供好きのHexhamと聞けば当然Dexterを思い起こしたと思われるのだ。

冒頭アンは父急死の際にテニソンやキャメロン夫人らを含むワイト島の人々から受けた恩に感謝の意を表すために*Island*を書いたので、その登場人物は実在の人物に近い、とした。しかし、彼らがみな実在の人物どおりに描かれているわけでは無論ない。たとえば、セント・ジュリアン夫人のエミリアはキャメロン夫人がモデルだとされているが、写真家ではないし、また、キャメロン夫人ほどエネルギッシュではなく病弱で、むしろテニソン夫人を思わせる。事実アンは背景となる土地をなるべく現実から遠ざけようという努力もしていた。*Island*執筆当時、アンは掲載予定の*Cornhill Magazine*の社主であるジョージ・スミス (George Smith) に宛てた手紙で次のように書いている。

My dear Mr Smith. I found I couldn't quite manage to unlocalise my Rhodomantade so I made it a little more so & put in a little bit about the Great Poet [i. e. Tennyson] . "You haven't been writing about me he said" [sic] one day, but I'm sure he wont [sic] mind...⁽³³⁾

小説の世界をなるべく現実世界に近いものにならないようにしようと努力はしているもののそれがうまくいかないことを嘆きつつ、しかし一方ではテニソンならあまり気にしないだろうからそのまま登場させてしまえとちゃっかり計算しているふうである。

したがって登場人物にはモデルがあるものの、モデルとなった人物をすぐさま指摘できるほど実態がそのまま投影されている場合とそうでない場合があるということになる。ヘクサムの場合はどうであろう。ワイト島に登場する写真家で当地の娘と恋愛模様を繰り広げそうなのはやはり当地を一度も訪れたことのないアメリカ人写真家ではなくて、そこに何度も足を運んだことのあるイギリス人の写真家であろう。その人物を造形するにあたってキャロルの姿を参考にしたということではないだろうか。

ヘクサムがキャロルだとすると非常に強い違和感を覚えさせられるヘスターに対する冷たい仕打ちは、実はアンが写真家デクスターから受けたものだと考えれば納得がいく。先に述べたように、ヘクサムとキャロルとの間には類似点が多くみられるが、ヘクサムとデクスターとの間にも同じことが言えるのだ。ヘクサムのモデルはキャロルだ、と決めつけてしまうから違和感を覚えるのであり、彼もまた実在の人物をもとにしてはいてもやはり

(32) *ibid.*

(33) *Correspondence*, vol. 3, p. 88. (September - October 1868)

創造された登場人物の一人だということなのだ。

するとここでまた疑問が生じることになる。前述したように、*Island* 執筆以前、アンはキャロルと実際に出会ったことはなかったはずなのだ。両者が初めて出会ったのは1869年10月5日、*Island* が *Cornhill Magazine* に掲載されたのは1868年11月。彼女はまだキャロルの実態を見ていないことになる。それでは彼女は どうやってキャロルを思わせるような人物を描きえたのであろうか。

キャロルの伝記で *Island* やアンのことに触れたものはあまり見当たらず、マイケル・ベイクウェル (Michael Bakewell) の *Lewis Carroll: A Biography* ぐらいのものであるが、彼もまたアン の伝記作家たちと同じく *Island* の制作年代を誤って認識している。アンとキャロルは1869年に外交官シングの家で出会い、その後1872年にキャロルがアン の家を訪ね、さらにその5年後にアンは彼の姿を *Island* で描いたとしているのだ。1877年は彼女の他のエッセーとともに単行本化された *Island* の出版年である。

Anne Thackeray drew on Dodgson's passion for photography in a novella she wrote five years later, *From the Island...* Although Mr Hexham, the 'dark, close-cropped' amateur photographer, is totally unlike Dodgson in manner and appearance, Anne Thackeray has given him a selection of Dodgson characteristics. He is nervous, absent-minded and loses his way about the house...⁽³⁴⁾

アン の側の伝記もキャロルの側のものもこの疑問には答えてくれない。ベイクウェルはアンがよく知ったキャロルの性格の一部をヘクスサムに付与したと言わんばかりで、かえって混乱の度を深めるばかりだ。

アンがしばしば訪れたワイト島のテニソンやキャメロン夫人の下には、その名声や人望の故にさまざまな人々がつどった。アメリカの詩人ロングフェロー (Henry Wadsworth Longfellow)、イタリアの英雄ガリバルディ (Giuseppe Garibaldi)、詩人ブラウニング (Robert Browning) やスウィンバーン (Algernon Charles Swinburne)、ナンセンス詩人エドワード・リア (Edward Lear)、画家エヴァレット・ミレー (John Everett Millais)、画家であり詩人であるダンテ・ガブリエル・ロッセッティ (Dante Gabriel Rossetti)、劇作家であり、『パンチ』誌の編集者 (後に編集長) トム・テイラー (Tom Taylor)、ジョーウィット (Benjamin Jowett) をはじめとするオックスフォードの学者たち、などなど枚挙にいとまがない。その中にオックスフォード大学クライスト・チャーチ学寮の学寮長ジョージ・リドル (Henry George Liddell) もいた。リドルはいうまでもなくキャロルに『不思議の国のアリス』の主人公アリスを発想させた実在のアリス—アリス・リドル—の父親である。キャロルはアリスをはじめとしてその姉妹たち、リドル家の家族を多く撮影しているため、彼も当時の写真撮影の様子をよく承知していたに違いない。また学寮長として大学の教員の一員であるキャロルについて多くを知っていた人物でもある。彼を通じてキャロルの情報がワイト島のこのサークルにもたらされていたということは大いに考えられることだ。

リドルとアンとの直接の関連を見てみると、彼女は1865年4月1日からテニソンのもとを訪れていて、4月13日にリドルと昼食を共にしている⁽³⁵⁾。キャロルの『不思議の国のア

(34) Bakewell, pp. 198-9.

(35) *Lady Tennyson's Journal*, p. 223.

リス』が出版されるのはまだちょっと先のことになるが、そのもととなった『地底の国のアリス』がアリス・リドルにプレゼントされたのが1864年11月26日のことなので⁽³⁶⁾、この作品のことが話題になったとしてもおかしくはない。

トム・テイラーは『不思議の国のアリス』の挿絵画家としてジョン・テニエル (John Tenniel) をキャロルに紹介した人物である。そして彼は次のような衝撃的な体験をしている。キャロルの日記にこうある。

Set off for Wandsworth [i. e. where Taylor's house was] in a fly soon after 8, and got there in about an hour, before they had assembled for breakfast.... I had the cellar as a dark room, and the conservatory as a studio, and succeeded in getting some very good portraits⁽³⁷⁾.

まだ知り合ってから間もない知人宅に朝食前に乗り込んで地下室と温室を占領してしまったというのだ。しかもこの訪問をテイラーに告げたのはわずか2日前のことであった⁽³⁸⁾—*Island*の冒頭、ヘクサムの手紙が彼の突然の訪問を告げるのを彷彿とさせるできごとである。

リドルもテイラーもみな写真家としてのキャロルをよく知る人々である。ロセッティやミレーも一家でキャロルに写真を撮られている。そのような人物がテニソンを中心とするサークルに出入りをしていて、ということはキャロルに関するさまざまな情報がこのサークルで共有されていたことを大いに示唆するのではないだろうか。

また、そもそもテニソン家の人々がキャロルとは旧知の間柄であった。最初キャロルは1857年9月に湖水地方で夏を過ごしていたテニソンの下を訪れて一家の写真を撮影した。その後は1859年4月にワイト島のテニソン邸を訪ねている。1862年4月にも当地でテニソン家の子供たちと遊んだり食事をともにしたことが妹メアリーへの手紙に書かれている⁽³⁹⁾。

そのような、いわばキャロルの情報が相当集積していたと思われる場所にアンは足繁く通っていたことになる。テニソン夫人の日記によると、彼女がワイト島を初めて訪れたのが1862年11月。父の死後、緊急避難的に身を寄せたのが1864年1月。その後1865年に3回、1868年に6回と、*Island*執筆の1868年までの間に彼女は11回かの地を訪れテニソン家に顔を出している。1865年末には正式な版の『不思議の国のアリス』も出版されており、テニソンの下にも献呈本が届けられている⁽⁴⁰⁾。世間で評判の書物のことが話題にのぼったことであろうし、小説家であるアンがそのことに興味がなかったとも思われえない。1868年10月25日の夫人の日記に “We say good-bye to Annie, delightful creature that she is” とあるように、テニソン夫人とアンとの間柄は非常に良好で、さぞかし話がはずんだことと思われる。テニソン夫人はワイト島のサークルの中心にいた人物で、このサークルの情報はほぼすべて把握していたと思われる。そのような夫人に可愛がられていたのだから、アンは望みさえすればキャロルに関する情報はいくらかでも手に入ったはずなのだ。

(36) *Diaries*, vol.5, p.9 (Sep. 13, 1864)

(37) *Diaries*, vol.4, pp. 248-9 (Oct.3, 1863).

(38) *ibid.*, p. 246 (Oct. 1, 1863).

(39) *Letters*, vol. 1, pp. 53-55.

(40) 献本リストが *The Diaries of Lewis Carroll*, ed. by R. L. Green, vol. 2, p.556に掲載されている。

アンとキャロルが直接出会ったのは *Island* が書かれた後であった。しかし、それにもかかわらずキャロルと多くの共通点を持つ写真家ヘクサムをアンが描きえたのは、彼女がテニソンを中心とするワイト島のサークルからキャロルに関する情報を得たからである、というのが筆者の結論である。残念ながらアンは *Island* の創作ノートのようなものは残していないし、日記や手紙にそれを示唆するような記述もない。したがって直接的にこの説を支持する材料は今のところ存在しない。しかし、状況証拠的にこれは大いに考えられることではないだろうか。作家であれば取材によって登場人物を作り上げるのはごく普通に行われる作業であるからだ。

<参考文献>

- Aplin, John, ed. *The Correspondence and Journals of the Thackeray Family*. 5 vols. London: Pickering & Chatto, 2011. Print.
- Bakewell, Michael. *Lewis Carroll: A Biography*. London: William Heinemann, 1996. Print.
- Dodgson, Charles Lutwidge. *Lewis Carroll's Diaries: The Private Journals of Charles Lutwidge Dodgson*. Ed. Edward Wakeling. 10 vols. Luton: The Lewis Carroll Society, 1993. Print.
- . *The Diaries of Lewis Carroll*. Ed. Roger Lancelyn Green. 2 vols. 1954. Westport: Greenwood Press, 1971. Print.
- . *The Letters of Lewis Carroll*. Ed. Morton N. Cohen. 2 vols. London: Macmillan, 1979. Print.
- Gerin, Winifred. *Anne Thackeray Ritchie: A Biography*. Oxford: Oxford University Press, 1981. Print.
- Garnett, Henrietta. *Anny: A Life of Anne Isabella Thackeray Ritchie*. London: Chatto & Windus, 2004. Print.
- James, Henry. *William Wetmore Story and His Friends* (1903): 363. Archive.org. Web. <<https://archive.org/details/williamwetmores04jamegoog>>
- Leach, Karoline. *In the Shadow of the Dream Child: A New Understanding of Lewis Carroll*. London: Peter Owen, 1999. Print.
- . "Lewis Carroll as Romantic Hero' -Anne Thackeray's *From an Island*." *The Carrollian: The Lewis Carroll Journal* 12 (Autumn 2003): 3-21. Print
- . *In the Shadow of the Dream Child: The Myth and Reality of Lewis Carroll*. London: Peter Owen, 2009. Print.
- Ritchie, Anne Thackeray. *Anne Thackeray Ritchie: Journals and Letters*. Eds. Abigail Burnham Bloom and John Maynard. Introduction and notes by Lillian Shankman. Columbus: Ohio State University Press, 1994. Print.
- Story, William Wetmore. *Graffiti d'Italia* (1875): x + 407. Archive.org. Web. <<https://archive.org/stream/graffitiditalia00storrich#page/n13/mode/2up>>
- Taylor, Roger. *Lewis Carroll: Photographer*. Princeton: Princeton University Press, 2002. Print.

Tennyson, Emily. *Lady Tennyson's Journal*. Ed. James O. Hoge. Charlottesville: University Press of Virginia, 1981. Print.

Thackeray, Anne. *From an Island*. 1877. Newport: Hunnyhill Publications, 1996. Print.

---. *From an Island: A Story and Some Essays*. [Tauchnitz ed.] 1877. Nabu Public Domain Reprints, 2010. Print.

[Thackeray, Anne] "From an Island, Part I." *The Cornhill Magazine*. Vol. 18, July to December (1868): 610-625. Archive.org. Web. 2 Nov. 2013.

<<https://archive.org/stream/cornhillmagazine18londonoft#page/n793/mode/2up>>

---. "From an Island, Part II." *The Cornhill Magazine*. Vol. 18, July to December (1868): 739-760. Archive.org. Web. 2 Nov. 2013.

---. "From an Island, Part III." *The Cornhill Magazine*. Vol. 19, January to June (1869): 62-78. Archive.org. Web. 2 Nov. 2013.

<<https://archive.org/stream/cornhillmagazine19londonoft#page/n3/mode/2up>>

(受理日：平成26年7月23日)

(校了日：平成26年9月8日)

[抄 録]

Anne Thackeray 著 *From an Island* には Hexham という若い写真家が登場し、訪れたとある島でそこに住む少女ヘスターと恋に落ちる。Karoline Leach はその著 *In the Shadow of the Dream Child: The Myth and Reality of Lewis Carroll* でこの写真家のモデルはキャロルであるという大変魅力的な説を提案した。しかし、ヘスターに対してヘクサムがとった心ない行動はまことにキャロルらしくなく、この説の最大の弱点となっている。本論ではなぜアンがヘクサムにそのような行動をとらせたのかを当時のアンの日記をもとに解明する。また、今回の調査により、*Island* は実は通説の1877年ではなく1868年に書かれていたことが判明した。1869年に初めて出会った両者は *Island* 執筆時にはまだ出会っていなかったのだ。それではアンはどのようにしてキャロルと見まがうようなヘクサム像を造形することができたのか、探ってみた。

—Abstract—

Hexham, a young photographer in Anne Thackeray's novella *From an Island*, falls in love with a young girl, Hester. Karoline Leach, in her book *In the Shadow of the Dream Child: The Myth and Reality of Lewis Carroll*, proposed that the model for this young man should be Lewis Carroll. However, Hexham's inconsiderate attitude against Hester does not seem to coincide with Carroll's character and this fact casts doubt upon Leach's attractive idea. With a close examination of Anne's diaries around the time of the creation of *From an Island*, the reason for Hexham's conduct came to light. It was based on Anne's own experience.

In preparing for this article, the fact that *Island* was actually written in 1868, not in 1877 as many authors insisted, was revealed. Anne met Carroll in 1869 for the first time. Then it is clear that Anne created the character of Hexham before actually meeting Carroll. How was it possible? I assume that she made it possible by gathering information about Carroll among Tennyson's group on the Isle of Wight.